

García-Iglesias C, et al. Long-term outcomes of nummular headache: A series of 168 patients and 1198 patient-years of follow-up. *Cephalalgia*. 2023 Sep;43(9):3331024231201576. doi: 10.1177/03331024231201576.

【背景・目的】貨幣状頭痛 (nummular headache: NH)は 2002 年に Pareja らによって報告された頭痛性疾患であり、ICHD-3 では「その他の一次性頭痛性疾患」に分類されている。円形あるいは楕円形で直径 1~6 cm の境界明瞭な部位に頭痛を認めることを特徴とする。有病率は人口 10 万あたり 6~9 名と推定されている。これまで 500 を超える症例の報告があるが、その自然史については不明な点が多い。本研究では、168 名の NH 患者の長期経過を報告している。

【方法・結果】スペインの Valladolid 大学病院の頭痛ユニットで施行された観察研究で、ICHD-3 の NH の診断基準に合致した症例を 2008 年 1 月から 2021 年 1 月までスクリーニングと適格性を評価して組み入れた。各症例の基本的情報と臨床データを前方視的に収集したが、3 ヶ月以上に 15 日以上頭痛を認める症例を慢性、15 日未満の症例を反復性とそれぞれ分類した。頭痛の性状、部位、形状、増強の有無、随伴症状、治療内容について記録した。全症例で頭部 MRI あるいは CT が施行され、二次性頭痛の除外が行われた。研究期間中に 7115 名の新患があり、282 名が NH の診断を受けた。最終的に 168 名が登録された。観察期間の中央値は 80.5 ヶ月であり、1198.2 人-年のデータが得られた。患者の平均年齢は 47.4 ± 18.0 (平均 \pm SD) 歳で、63.7%は女性であった。診断時年齢の中央値は 49 歳であり、診断されるまでの病期の中央値は 10 ヶ月であった。なお、49.2%の症例は片頭痛、27.1%の症例では一過性表在性頭痛の診断を受けていた。67.9%は慢性 NH であり、1 ヶ月あたりの頭痛日数の中央値は 20 日であった。94.0%の患者が 1 ヶ月あたり 4 日以上頭痛を認めていた。頭痛の性状としては圧迫性が主体 (55.4%) で、中等度の頭痛強度 (VRS 6) で、頭頂部に認めることが最も多かった (39.3%)。頭痛増悪時は穿刺様の疼痛が最も多く訴えられていた。典型的には頭痛部位は円形の形状で約 4 cm であった。随伴症状を認める頻度は低かった。アロディニアは 37.5%、痛覚過敏は 34.5%にそれぞれ認められた。治療を要する症例は 66.7%であり、使用された治療薬の 40.2%は NSAIDs、33.0%がアセトアミノフェンであった。しかし半数程度は部分的な反応しか得られていなかった。予防薬は 66.7%の症例で必要であったが、約半数は 1 剤のみが用いられていた。予防薬としては、ガバペンチンが 61.6%で、A 型ボツリヌス毒素が 33.9%でそれぞれ用いられていた。予防薬が処方された症例の約半数では最適な反応が、81.3%では十分な反応性が得られていた。経過観察開始時で活動性 NH を認めていた患者 111 名の中で 10 名は予防薬による治療反応性が認められず、11 名では治療に対する忍容性に問題があった。そのような患者 21 名の中で、4 名では改善は一時的に得られても持続しない状況が中央値で 91 ヶ月にわたって持続し、経過観察終了時点でも 11 名患者は疾患活動性が持続していた。全体的には、経過観察終了時点 (中央値: 6.7 年) で 48.2%の症例は疾患活動性を認めなかった (6 ヶ月を超えて頭痛なし)。

【結論・コメント】6.7 年の経過観察で 48.2%の症例では疾患活動性がなくなっていたことから、NH は予後が悪くない疾患と考えられた。予防療法が必要だった症例は 2/3 に相当し、80%では治療反応性が得られていた。また、本研究の結果から NH は片頭痛と誤診されている症例が少なからず存在することが示唆された。